慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『百科全書』未開領域 : イタリア異本版研究の基盤情報
Sub Title	Un champ inconnu dans les recherches sur l'Encyclopédie : une information fondamentale pour les recherches sur les éditions des variantes italiennes
Author	小嶋, 竜寿(Kojima, Ryuji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.3 (2006. 12) ,p.216(113)- 233(96)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鷲見洋一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910003-0233

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『百科全書』未開領域
－イタリア異本版研究の基盤情報－

小嶋　竜寿

『百科全書』研究は様々な困難を抱えながらも[1]、近年その対象をパリ初版に限定することなく、影響関係を持つ先行事典および後続事典へとその研究領域を広げている[2]。その結果、『百科全書』という書物およびそこに織り込まれた情報は、フランス国内のみならず、ヨーロッパひいては世界規模で広く流通・変容していくことが次第に明らかになってきた。フランスに隣接するイタリアでも、他国に先駆けて、いち早くこの書物の国内導入が試みられている。しかし、イタリアで刊行された『百科全書』異本に関する研究は立ち遅れ、依然としてその全貌を顕わにしないままにある。そこで本論では、イタリア異本版 2 種（Lucca 版、Livorno 版）に関する先行研究をまとめ、また、原本から得られた基礎的な書誌情報を提供し、『百科全書』研究に資することを目的とする。

Ⅰ．『百科全書』異本研究

20 世紀後半になると、『百科全書』研究は幾人かの研究者を中心に大きく発展した。ここでは『百科全書』研究史を概観し、その中でイタリアを含める異本研究がなされるに至った経緯を確認しておくことにしよう。

『百科全書』研究は幾つかの先駆的なものを除き、1960 年代から 70 年代にかけて J. Proust や J. Lough らによって基盤が確立されると同時に、大きな飛躍を遂げることになる[3]。パリ版を巡り、ディドロを始めとする

項目執筆者の同定、関係者および購買層の社会階級調査、そして執筆項目内で使用されている典拠調査などが行われた[4]。Proust らによって『百科全書』は、18 世紀研究に付随する参考資料に留まるものではなく、作品として固有の構造を持つ、独立した研究対象になりうるものであることが証明されたのである。

その後、完全といえないまでも、パリ版についての研究にある程度の進捗が認められるようになると、『百科全書』研究は Proust らの研究を基に、パリ版から関連諸版へとコーパスを拡げ始めた。1970 年代後半、R. Darnton はこのような潮流の嚆矢ともいえる研究を発表する[5]。Darnton は『百科全書』を商品として捉え直すことによって、その流通経路と拡がりを明らかにした。そして、『百科全書』は高価で大振りなパリ版ではなく、安価で小振りになったスイスのヌーシャテル版を中心に、ヨーロッパ中に流通していったという事実が浮き彫りにされたのである。この研究によって、Darnton はパリ版以外の版本の考察もまた、『百科全書』研究において重要な役割を担っていることを知らしめたといえる。もちろん、70 年代以前にも、パリ版以外の版本に目を向けた研究は存在していた[6]。また、Proust らによって進められた先行事典類との比較を通じた典拠研究も、『百科全書』が一つの完結した書物ではありえないことを示していた。しかし、その後の異本研究を鑑みる時、その嚆矢はやはり Darnton の研究となるだろう。

Darnton 以後、関連辞典類との比較調査が陸続と行われた。主だった例として、F. A. Kafker 編集による幾つかの論文集、そしてパリ版と先行事典類との比較では、M. Leca-Tsiomis の研究[7]。そして、後続版との比較においては、上述の Darnton の著作以外に、C. Donato らを中心とする Yverdon 版に関する研究[8]が挙げられる。これらの研究を通じて現れた『百科全書』はもはや、18 世紀フランス国内で、他の書物と別個屹立する一大モニュメントではなかった。ヨーロッパ全土、あるいはそれ以上に広い範囲に亘る思想流通媒体、経済価値を持つ商品としての姿が顕わになったのである。さらには、『百科全書』に限らず、百科全書的な思想傾向そのも

のを歴史的常数とみなし、古今東西の知識（情報）の集積・分類・配置についてまとめられた論文集までも登場するようになった[9]。

20 世紀半ば以降、18 世紀研究における参考文献としてではない、独自の構造を持つ作品としての性質を認めることによって、『百科全書』研究は自らのアイデンティティを確立した。その後 1970 年代以降から現在に至る新局面は、先に確立されたアイデンティティを発展させつつ、さらに従来とは異なる『百科全書』の姿を顕わにしている。『百科全書』は再び、18 世紀フランスに留まることのない、それ以上の時空間の拡がりを有する世界としての姿を見せ始めた。その結果、『百科全書』は近代胎動期における知の様々な潮流の合流地点であると同時に、分岐点としての役割を果たしていたことが明らかになってきたのである[10]。

イタリア異本版研究も上記の研究史の流れに棹差している。パリ版刊行から僅か数年後、フランスとは異なる文化・政治・経済形態をもつイタリアに『百科全書』は移植された。移植と同時に姿を変える『百科全書』を検討することは、18 世紀中葉期イタリアの思想状況のみならず、フランスのそれをも逆照射し、ひいては啓蒙思想のもつ多様な容貌の一側面を示すことにもなりうるだろう。しかしながら、現時点におけるイタリア異本版研究は依然として端緒についたに過ぎないままである。スイスのヌーシャテル版やイヴェルドン版研究に比べても、大きく水をあけられている。さらに、そこで論じられた問題は整理されることなく、依然として放置されたままの状態にあるといわざるを得ないのである。

Ⅱ. イタリア異本版研究

現在、簡潔な紹介記事を除き、イタリア異本版に特化した論文は数少ない[11]。管見によれば、Levi-Marvano、Franco Venturi、Mario Rosa、Madeleine F. Morris の 4 つ論文にこれまで得られた情報の多くが集約される[12]。

これらの研究は、大別すると、イタリア異本版の刊行地の歴史的状況および編集者の素性（Levi-Marvano、Rosa）、パリ＝イタリア間における啓蒙思想に対する見解上の相違（Venturi、Rosa）、イタリア異本版の特徴であ

る本文に付された脚注の概観（Morris）に大別することができる。本章では上述の論文をもとに、イタリア異本版研究を整理しておくことにする。

Ⅱ-1.　『百科全書』受容背景

共通背景：まず、『百科全書』の受容を可能にする歴史的背景として、当時のイタリアには、先端科学への希求が広く行き渡っていた。1748 年にヴェネチアやナポリで Chambers のサイクロピーディアが既に翻訳されていたことからも、この様子をうかがい知ることができるだろう。また、科学技術の普遍化への動きの背後にフリーメーソンの影響を指摘する声もある [13]。しかし、全面的に先端科学が歓迎されたわけではない。当然のことながら新思潮に対する反発も起きている。新旧の思想の軋轢を回避しようとする動きの中で注目されたのが、百科全書派と呼ばれる人々の中でも比較的穏健的な態度を示していた d'Alembert の存在であった。イタリアにおける『百科全書』は、なによりもまずこの人物の作品としてであり、Diderot のものとしてではなかったのである。

このような背景を、ルッカやリヴォルノは共通要素として有していたわけであるが、都市としての状況は全く異なっていたようである。以下、その様子を追うことにしよう。

Lucca の情勢：ルッカは 18 世紀中葉、都市としてはすでに衰退期を迎え、政治・経済ともに凋落の一途を辿るばかりであった。しかし、印刷業だけはなんとか勢力を保ち、都市経済を支える一角としての役割を維持していた。保守的な小都市で『百科全書』の刊行は、編集者の啓蒙思想への関心とともに、都市の経済事情が加味されて初めて可能になったといえるのである。

編集者の Diodati は貴族階級出身である。しかしその後、身分差のある結婚をしたことを理由に父親から家督を剥奪されてしまった。パリで評判を呼んでいた『百科全書』のイタリア異本版着手は、生計を立てるための手段に他ならなかったのである。また、パリ版の持つ反キリスト教的な性

格を持ち合わせないこの編集者は、カトリック側の教義と啓蒙思想の折衷に腐心していたことが認められる。その結果、『百科全書』ルッカ異本版は、脚注執筆者に教会の権力者を多く迎え入れることになった。

なお、Lucca 版はパリ版刊行から 7 年後、1758 年に刊行が開始され、1776 年に完成。フォリオ版で本文 17 巻、図版 11 巻、パリ版と同じ分量である。出版社は Vincento Guintini。出版部数は 1500 部、価格は 737 リーヴルであった [14]。

Livorno の情勢：ルッカ異本版の商業上の成功は、その後、同じトスカーナ州にあるリヴォルノにおいても『百科全書』の刊行を促すことになった。リヴォルノは印刷業が盛んであった点に関してはルッカと共通しているが、貿易都市として発展著しく、また、啓蒙思想を積極的に受け入れる世俗権力者によって統治されていた都市状況は、ローマのお膝元ともいえるルッカと大きく異なっている。『百科全書』受容地としては、ルッカに比べ遥かに理想的な都市でることが容易に推察できる [15]。

ブルジョワ階級に生まれた編集者の Giuseppe Aubert は、ミラノの啓蒙思想家として名をはせていた Pietro Verri らと深い親交があり、『百科全書』の編集にもその影響を受けている。ところが、ルッカ異本版と異なり、カトリック勢力の圧力に配慮する必要もなく、また、トスカーナ大公らがパリ版の完全復刻を望んでいたにも関わらず [16]、Aubert は『百科全書』パリ版に脚注を加えた。その理由としては、思想的側面よりも、ルッカ異本版との商品差別化を図るための経済的理由によるところが大きかったようだ。

このような状況下で、リヴォルノ異本版はパリ版から遅れること 19 年、ルッカ異本版刊行時から 12 年後、1770 年に刊行が開始され、1778 年に完成している。これはパリ版、ルッカ異本版に続き、フォリオ版として『百科全書』最後の版本であった。大きさ・分量ともに、ルッカ異本版と同じく、フォリオ版で本文 17 巻、図版 11 巻。出版社はトスカーナ大公であった Pierre Léopold によって設立された L'imprimerie de la société[17]。発

行部数は 1500、価格はルッカ異本版よりさらに安価になって 574 リーヴル [18]。

Ⅱ-2. パリとイタリアにおける思想的相違

上述の都市状況からも分かる通り、イタリアにおける『百科全書』の出版は、主に科学的な関心の高さと経済上の理由に大きな比重が認められてきた。しかしその一方で、イデオロギーの観点からイタリアとパリとの間にある違いについて無視することもできない。

その最も顕著な事例が 1759 年に起こる。パリにおける『百科全書』発禁処分事件である。宗教上の見解と政治経済的な要素が絡み合って、イタリアにおいては結局のところ、発禁処分になるのはパリ版のみであって、ルッカ異本版はその処分を免れた。しかし、その決着は無償では済まされなかった。脚注執筆者の一部は事業から手を引き、また、脚注自体その性質を修正せざるを得なくなってしまったのである。当初、比較的啓蒙思想に友好的な立場からカトリック的見解を挿入していたが、この事件以降、主に項目に書かれた事例の修正や、Jaucourt の書いた項目への反論へと脚注の比重が移されていくことになる。つまり、イタリアにおける『百科全書』はカトリック的見解によってその性質を変容させ、自ずとパリ版とは異なる相を持つに至ったのである。

一方、宗教上の意見対立において、世俗権力に保護されていたリヴォルノは、確かにルッカ同様の困難に直面することはなかった。しかし、この事実は何ら問題を含まないものではない。この問題に対して、これまでに 2 つの姿勢が示されている。一つはリヴォルノ異本版を啓蒙思想の拡大の流れに当て嵌め、ルッカ異本版よりも宗教的な桎梏を逃れていると評価する意見。もう一つは、宗教上の摩擦というフランスからイタリアへの啓蒙思想の伝播過程で生じた問題に直接関与しないと理由で、思想史上の問題おいてさほど意味をなさないという見解である [19]。こうした見解の相違は、ルッカ異本版とリヴォルノ異本版に対する評価に直結する性質をもつものであるが、何よりもまず、啓蒙と宗教という大きな問題がイタリア異本版

に内包されていること物語っているといえるだろう。

Ⅱ-3. 脚注について

これまでの研究は、イタリア異本版に関する歴史的・思想史的見地からの情報を提供してくれた。そこで言及される資料の多くは、今日でも活字化されておらず、非常に貴重であるといえる。しかし、イタリア異本版がパリ版とは大きく異なる点、すなわちその特徴というべき点についてはほとんど言及されてこなかった。言及されても否定的な言辞が一言述べられる程度である。

この点で異なるのは Morris の論文である。この研究は、歴史や思想史に関しては他の論文から多くを引き継いでいるが、唯一脚注に関する詳細な記述を含んでいる。そこから得られる知見は、タイトルページを始めとする書籍全般の描写、脚注執筆者の個人名、脚注の概観など、従来では省みられなかった情報が少なくない。さらに 1759 年以降、ルッカ異本版が Jaucourt 執筆項目に対する批判を強める傾向なども指摘している。また、ルッカとリヴォルノの両版を比較して、前者において個人的見解が比較的如実に発露しているのに対し、後者では反対に、非常に淡々とした記述であることも記されている。

イタリア異本版について今後研究を進める際、これまでの研究の意義を確認するためにも、Morris のもたらした脚注の詳述は、恐らく不可欠な要素であるように思われる。ただ残念なことに、この論文では、脚注執筆者の同定可能範囲から、ルッカ・リヴォルノ両版ともに第 7 巻までを重要視し、その結果、第 8 巻以降の記述が軽視されてしまっている。

そこで、本論では Morris 論文をさらに推し進め、新たにイタリア異本版の特徴である脚注のデータを掲げることにする [20]。

Ⅲ. イタリア異本版脚注データ： Lucca 版、Livorno 版

Lucca 版：イタリア異本版（ルッカ、リヴォルノ両異本版）における独自性は、先に触れたように、パリ版のテクストに対する脚注が挿入されてい

るという点にある。ルッカ異本版の脚注執筆者は、本文に記入された記号を参考に、その多くが同定可能になっている。各巻の簡略な書誌情報ならびに、署名記号及びその執筆数をまとめると以下のようになる（巻数後のアルファベットは掲載項目の範囲を示す）：

第 1 巻（A）：1758 年出版：本文 777p.：総脚注数 136。

内訳：(D)の執筆項目数 24、以下、(G)34、(M)19、(N)9 、(P)34、(S)1、(V)9、未署名脚注 6。その他、ルッカ異本版第 3,4 巻に付されている SUPPLÉMENT DE NOTES 内で(D)1、(L)11、(M)2、(V)1。

第 2 巻（B=CH）：1758 年：本文 740p.：総脚注数 92。

内訳：(D)20、(G)11、(M)19、(V)21、(P)7、(S)2、未署名脚注 6。本巻では、(N)の署名が消え、(L)と(Z)が新たに加わっている。執筆脚注数はそれぞれ 2、3 となっている。その他第 3,4 巻に付されている SUPPLÉMENT DE NOTES 内に(L)1、(O)3、未署名項目 1。

第 3 巻（CH=CONS）：1759 年：本文 751p.：総脚注数 98。

内訳：(D)18、(G)1、(L)1、(M)35、(P)8、(S)2、(V)25、未署名脚注 6。本巻から新たに(O)が執筆者リストに掲載される。しかし本文中の脚注ではなく、その前に挿入されている SUPPLÉMENT DE NOTES においてその名を確認が可能。また、リストには載っていないものの、(J)[21] が 1 項目執筆している。その他第 3,4 巻に付されている SUPPLÉMENT DE NOTES 内に(L)10、(M)1、(V)1。

第 4 巻（CONS=DIZ）：1759 年：本文 911p.：総脚注数 59。

内訳：(D)10、(J)8、(L)1、(M)29、(P)3、(V)2、未署名脚注 2。新たに(B)と(W)の名前が記載。前者の執筆脚注数は 4 箇所であるが、後者の執筆は第 3 巻の(O)同様、SUPPLÉMENT DE NOTES にて 1 箇所確認可能。その他、第 3,4 巻に付されている SUPPLÉMENT DE NOTES 内で(L)5。

第 5 巻（DO=ESY）：1759 年：本文 857p.：総脚注数 67。

内訳：(D)23、(J)3、(M)12、(P)3、未署名項目 6。この巻では（一）

という署名が 19 箇所、また、項目« Enrolement (Art milit.) »に付されている脚注末には執筆者の署名を囲む括弧があるものの、そのなかに執筆者のサインは印刷されていない箇所が 1 箇所認められるが、いずれもその執筆者は同定不可能。

第 6 巻（ET=FN）：1760 年：本文 781p.：総脚注数 67。内訳：全て未署名。

第 7 巻（FO=GY）：1760 年：本文 886p.：総脚注数 78。

内訳：(W)1、その他全て無署名。

第 8 巻（H=ITZ）：1766 年：本文 775p.：総脚注数 106。

内訳：(D)10、(P)6、(W)21、(Z)24、未署名脚注 3。本巻から(A)の印のついた脚注が出てくるが、執筆者の同定を可能にする記述は見出せない。なお、(A)の脚注数は 41。項目« HIÉRARCHIE »に付された脚注に(X)というサインも 1 箇所認められるが、このサインについても(A)と同様。

以下 9 巻以降をみていくことにするが、ここから先は殆ど新たな脚注執筆記号は現れない。現れたとしても、その特定を可能にする注記は付されていない：

第 9 巻（JU=MAM）：1767 年：本文 774p.：総脚注数 77。

内訳：(A)16、(D)4、(P)2、(W)27、(Z)13、未署名脚注 14。その他、署名者サイン（C）が一箇所。

第 10 巻（MAM=MYV）：1767 年：本文 740p.：総脚注数 41。

内訳：(A)15、(D)10、(P)2、(W)12、(Z)1、未署名脚注 1。

第 11 巻（N=PARI）：1768 年：本文 776p.：総脚注数 62。

内訳：(A)7、(D)2、(P)1、(W)36、(Z)11、未署名脚注 4。この巻にも署名者(C)が一箇所。

第 12 巻（PARI=POL）：1769 年：本文 777p.：総脚注数 52。

内訳：(D)4、(J ・ M)1、(W)26、(Z)14、未署名項目 7。なお、(J ・ M)のサインは(J ・ M)なる人物 1 名なのか、あるいは(J)と(M)の 2 名なのか判然としない。

第 13 巻（POL=REG）：1769 年：本文 737p.：総脚注数 31。

内訳：(D)3、(W)25、未署名項目 3。

第 14 巻（REG=SEM）：1770 年：本文 808p.：総脚注数 57。

内訳：(D)6、(W)10、(Z)38、未署名脚注 3。

第 15 巻（SEN=TCH）：1770 年：本文 806p.：総脚注数 12。

内訳：(D)3、(W)7、(Z)1、未署名脚注 1。

第 16 巻（TEA=VEN）：1771 年：本文 827p.：総脚注数 31。

内訳：(D)2、(P)2、(W)27。

第 17 巻（VEN=ZZZ）：1771 年：本文 764p.：総脚注数 29。

内訳：(D)3、(W)26。

刊行年度に関しては、1758 年以来、ルッカ異本版は年 2 ～ 3 巻という順調なペースで刊行を続けていた。しかし、1760 年の第 7 巻出版後、一時中断を余儀なくされる。1759 年は、パリにおいて『百科全書』対する発禁命令が下され、ローマでも『百科全書』に対する非難が起こっている年に当たる。パリ版の出版中断は当然ルッカ異本版の刊行にも影響を及ぼした。

その上、パリ版の危機の影響は刊行年度に留まるものではなかった。パリ版の国内流通は禁じられらたものの、幸いにしてルッカ異本版に対して発禁処分は下されずに済んだ[22]。しかし、こうした社会情勢は、イタリアの編集者及び脚注者に対する脅威としては十分なものであったらしく、署名を記入することに対して著しく慎重な態度を示す様子が窺われる。第 5 巻から始まり、とりわけ第 6,7 巻に見られる未署名脚注の多さはその証左であるといえるだろう。

本文復刻に加えて脚注を施されたルッカ異本版であるが、上記のページ数からして明らかにパリ版よりも少ない（例えば、パリ版第 1 巻は本文 914 ページである）。このことからも容易に推測できる通り、そこに印刷された文字も非常に細かい。そして、ページを占める文字数も当然多い。さらに脚注の字の細かさについていえば、ニューヨークで出版された『百科全書』縮刷復刻版（1969）にも匹敵するほどであることを付け加えてお

く。

ルッカ異本版において、脚注執筆者の同定がある程度可能であることは先に触れた通りであるが、脚注末のサインと執筆者の関係および、サイン数と掲載巻は以下のようになっている：

(A)：不明, 79 (Tome 8 ～ 11)

(B)： D. Jacques Antoine Biagini, 4 (Tome 4)

(C)：不明, 2 (Tome 9, 11)

(D)： M. Octavien Diodati, 143 (1 ～ 5, 8 ～ 17)

(G)： M. Charles Giuliani : Officier dans les Troupes de la République de Lucques, 46

(J)： D. Jacques Menchini, 12 (Tome 3 ～ 5)

(L)： P. Sébastien Sacchetti : Chan. Reg. de la Congrégation du Rhin, 20 (Tome 2 ～ 4)

(M)： Le Pere Jean Dominique Mansi : de la Congrégation de la Mère de Dieu, 117 (Tome 1 ～ 5)

(N)： Le Pere Abbé D. Ubald de Nobili : Chanoine Régulier de la Congrégation de Latran, 36 (Tome 1, 9)

(O)： Mgr. Jean François Orsucci : Premier de l'Eglise de S. Alexandre Maieur, 3 (Tome 3)

(P)： M. Sébastien Paoli : Docteur en Philosophie, et en Médecine, 68 (Tome 1 ～ 5, 8 ～ 11, 16)

(S)： M. Sébastien Donati : Recteur de l'Eglise de Saint Concorde, 5 (Tome 1 ～ 3)

(V)： Mgr. Philippe Venuti : Grand Prevôt de l'Eglise de Livourne, 59 (Tome 1 ～ 4)

(W)： Le Pere W. Coldelier, 218 (Tome 4, 7 ～ 17)

(X)：不明, 1 (Tome 8)

(Z)： M. Laurent Nicoletti, 120 (Tome 2, 8 ～ 12, 14,15)

(－)：不明, 19

(未署名)：不明, 211

(M ・ J)：不明, 1

上記の表から、ほぼ全て匿名脚注になっている第 6,7 巻を除き、全巻通して活動していたのは Diodati のみであり、それ以外の執筆者は概ね前半のみか、後半のみの参加であることが分かる。ところが執筆数に注目する場合、分量の多さはともかく、(D)に匹敵する数の脚注を執筆している者(M, Z)やそれ以上の執筆数(W)の者も存在していることは注目に値するだろう。また、全体で一体どれほどの執筆者が脚注作成に関わったのか現時点では判然としないが、Diodati を始め、同定可能な人物が総計 13 名いる。そのうちの 8 名(G, M, N, S, V, L, O, W)はカトリック系の聖職者であり、このことから、ルッカ異本版の製作がパリ版と異なるスタンスから編集されていることが分かる。

なお、図版 11 巻については本論で詳説しないが、第 1 巻から順に 1765 年、1766 年、1667 年、1768 年、1769 年、1770 年、1772 年、1773 年、1773 年、1775 年、1775 年に刊行されている。ほぼ一年に 1 冊のペースを守っていたようである。出版年からも分かるように、ルッカ異本版はパリ版刊行とほぼ同時に出版されていた。この出版ペースが可能になった理由として、以下で述べるリヴォルノ異本版とともに、イタリア異本版はパリ版の本文および図版をそのまま復刻した点を挙げることができるだろう。

Livorno 版：リヴォルノ異本版もまたルッカ異本版同様、パリ版の本文をそのまま縮刷復刻し、ページ末に脚注を挿入している。しかしこの脚注は、ルッカ異本版のような、全て版独自のものではない。リヴォルノ異本版は本文をパリ版から、脚注をルッカ異本版から流用しているのである [23]。出版当初、パトロンである Pierre Léopold や Pietro Verri はパリ版の完全復刻を望んだが、編集者である Aubert は単なる復刻版の売れ行きを危ぶみ、あえて脚注を施したようだ。このような出版方法は、統治者からの援助とともに、以下の表を見ても明らかなように、出版の加速化、低コスト化の

成功にも繋がっていると考えられる。

リヴォルノ異本版がルッカ異本版を参照にしているのは、なにも出版上の経済性においてだけではない。基となるパリ版が教会権力側からの弾劾対象となっている以上、いかに世俗権力者の庇護があったとしても安心できなかったのだろう。リヴォルノ異本版は政治的な配慮から、ルッカ異本版を参考にして、脚注執筆者のサインを一切伏せている。しかし、出版者のこの選択よって、現在我々はリヴォルノ異本版の脚注執筆者についての同定ができなくなってしまっている。したがって、ルッカ異本版のように執筆者について記述することはできないが、各巻の脚注数は以下のようになっている：

第 1 巻 (A)： 1771 年：本文 846p.：総脚注数 172。

第 2 巻 (B=CEZ)： 1771 年：本文 843p.：総脚注数 57 ：通常、脚注冒頭には(1), (2)…などの表記が認められるが、1 箇所でその表記は認められず。

第 3 巻 (CH=CONS)： 1771 年：本文 852p.：総脚注数 192 ：うち脚注末に Addition の表記のあるものが 110。その他脚注末に(V)の印の付されたものが 1。この(V)印については明らかにされない。脚注末の＊印のついたものに関しては、ルッカ異本版の脚注以外のもの、すなわちリヴォルノ異本版独自の脚注とされている [24]。しかし、実際に脚注末に＊印が現れるのは第 4 巻以降のことである。本巻における脚注末の Addition は凡そ＊印の代わりに用いられていると考えることができる [25]。なお、Addition が用いられるのは 183 ページ以降。また 265 ページ以降、各ページ内で複数の脚注流用が認められる場合、各ページ最後の脚注末に Additions と記入されている。

第 4 巻 (CONS=DIZ)： 1772 年：本文 1005p.：総脚注数 202 ：本巻から前巻に記されていた Addition の表記は消え、その代わりに脚注末に＊印が記されるようになる。その数 174。

第 5 巻 (DO=ESY)： 1772 年：本文 944p.：総脚注数 157 ：脚注末＊

印数 122。

第 6 巻 (ET=FN)： 1772 年：本文 866p.：総脚注数 75。脚注末＊印数 32。

第 7 巻 (FO=GY)： 1773 年：本文 993p.：総脚注数 102。脚注末＊印数 49。

第 8 巻 (H=ITZ)： 1773 年：本文 854p.：総脚注数 96。脚注末＊印数 41。

第 9 巻 (JU=MAM)： 1773 年：本文 867p.：総脚注数 91。脚注末＊印数 30。

第 10 巻 (MAM=MY)： 1773 年：本文 845p.：総脚注数 70。脚注末＊印数 30。

第 11 巻 (N=PARI)： 1774 年：本文 887p.：総脚注数 77。脚注末＊印数 25。

第 12 巻 (PARL=POL)： 1774 年：本文 886p.：総脚注数 66。脚注末＊印数 17。

第 13 巻 (POM=REGG)： 1774 年：本文 847p.：総脚注数 47。脚注末＊印数 18。

第 14 巻 (REGGI=SEM)： 1775 年：本文 888p.：総脚注数 73。脚注末＊印数 19。

第 15 巻 (SEN=TCH)： 1775 年：本文 908p.：総脚注数 26。脚注末＊印数 15。

第 16 巻 (TE=VENERIE)： 1775 年：本文 920p.：総脚注数 41。脚注末＊印数 12。

第 17 巻 (VENERIEN=Z)： 1775 年：本文 759p.：総脚注数 35。脚注末＊印数 9。

各巻の記述範囲はルッカ異本版と同じだが、脚注数およびページ数は多い。しかし、これはリヴォルノ異本版の脚注の文章が長いことを意味しない。後者は前者に比べて文字が多少大きいことと、1 ページ内の文字数がやや少ないことに起因する。

リヴォルノ異本版独自の脚注において、分量の多い事例は多くない。ルッカ異本版から流用している脚注の方が、かえって長いことが多い。また、流用の脚注数は年々減少する傾向を認められるが、これはルッカ異本版における脚注数の減少に比例していると考えることができるだろう。また、巻が進むに連れて、ルッカ異本版からの脚注流用比率は増すばかりであり、第 10 巻以降はルッカ異本版の脚注がほぼ全て認められる [26]。

図版は 1772 年から 1778 年にかけて全 11 巻が刊行されている。内訳は 1 ～ 3 巻（1772 年）、4 巻（1774 年）、5 ～ 7 巻（1775 年）、8 ～ 10 巻（1776 年）、11 巻（1778 年）である。

Ⅳ. まとめ

以上が『百科全書』イタリア異本版（ルッカ異本版、リヴォルノ異本版）の独自性を形成する脚注についての基礎情報である。パリ版のいかなる項目に対し、ルッカ異本版の編集者あるいは学者たちは脚注を施したのか、あるいは施さなかったのか。リヴォルノ異本版については、パリ版に対してのみならず、ルッカ異本版に対しても同じ編集上の疑問がある。さらにリヴォルノ異本版刊行時、時を同じくして隣国スイスでもイヴェルドン版（1770 ～ 1775）が刊行され、『百科全書』はまさしくヨーロッパ規模で浸透しつつあった。共通して先端科学に高い関心を示しながらも、カトリック的思考が色濃く残されている点でパリ版と性質を異にするイタリア異本版は、プロテスタントの観点からパリ版本文を大幅に書き換えたイヴェルドン版とも、当然異なる性質を持ちうる。当初『百科全書』という共通の容れ物を持ち、また、科学技術への関心を共有しながら、宗教的な観点や社会状況の違いから、中身としての思想は変容を遂げる。中身の変化に伴って、容れ物としての書籍もその受容過程において変化を被る。と同時に、変わらない部分も存続する。こうした変化と連続性の相は、やはり『百科全書』原典を逐一比較することによってのみ追跡可能になるのではないだろうか。

現在立ち遅れの目立つイタリア異本版研究であるが、これまでの『百科

全書』研究同様、基礎情報を収集することから調査を始めることによって、イタリア異本版の特性についてのみならず、啓蒙思想のあり様についての認識を深めることを可能にしてくれるように思われる。

注

1　『百科全書』研究が直面する問題に関するさらに詳しい記述は鷲見洋一「『百科全書』研究の現在」、『芸文研究』89 号 2005 年 12 月、p.(29)-(48)を参照。

2　『百科全書』研究史については逸見龍生「『百科全書』を読む－本文研究の概観と展望」(『欧米の言語・社会・文化』、第 11 号、新潟大学人文学部、平成 17 年、p.39-92) に詳しい。

3　J. Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Albin Michel, 1962. J. Lough, *Essays on the Encyclopédie of Diderot and d'Alembert*, Oxford University Press, 1968. *The Encyclopédie*, Longman group Ltd. 1971.

4　Voir note 3. 典拠調査の意義については、小関武史「『百科全書』研究にとっての典拠調査の意義」、『一橋論叢』、4 月号、平成 12 年、p.(148)-(162)。

5　*L'Aventure de l'Encyclopédie*, Librairie Académique Perrin, 1982. オリジナルは *The Business of Enlightenment : A Publishing History of the Encyclopédie 1775-1800*, Harvard University Press, 1979.

6　Darnton 以前にも G. B. Watts.による幾つかの関連諸版研究が残されている。逸見龍生、前掲論文参照。

7　F. A. Kafker, ed., *Notable encyclopedias of the seventeenth and eighteenth centuries : nine predecessors of the Encyclopédie* (Studies on Voltaire and the Eighteenth Century, Vol. 194), Oxford, Voltaire Foundation, 1981. *Notables encyclopedias of the late eighteenth centurie: eleven successors of the Encyclopédie* (Studies on Voltaire and the Eighteenth Century, Vol. 315), Oxford, Voltaire Foundaition, 1994. M. Leca-Tsiomis, *Ecrire l'Encyclopédie* (Studies on Voltaire and the Eighteenth Century, Vol. 375), Oxford, Voltaire Foundation, 1999.
その他に以下のような研究がある。Y. Sumi, « < Atomosphere > et < Atomosphère >. Essai sur la *Cyclopaedia* et le premier Prospectus de l'*Encyclopédie* », *Vérité et littérature au XVIIIe siècle*, Honoré Champion, 2001, p.271-284. 逸見龍生「『百科全書』第一巻ディドロ寄稿項目における『王立科学アカデミー概要および論文集』典拠」、『人文科学研究』(新

潟大学)、平成 8 年、p.49-70。

8 Edité par Jean-Daniel Candaux, Alain Cernuschi, Clorinda Donato, *L'Encyclopédie d'Yverdon et sa résonnance européenne : contextes, contenus, continuités*. Slatkine, 2005.

9 *L'Encyclopédisme*, sous la direction de Annie Becq, Klincksieck, 1991. *Tous les savoirs du monde*, sous la direction de Roland Schaer, Flammarion, 1996.

10 新たな『百科全書』像を浮かび上がらせる研究として、寺田元一の以下の著作がある。『編集知の世紀』、評論社、2003 年。

11 研究書誌については後述の Madeleine F. Morris の論文末に一覧が付されている。

12 E. Levi-Marvano, « Les éditions toscanes de l'*Encyclopédie* », *Revue de littérature comparée*, no.3, 1923, p.213-256. Franco Venturi, « L'*Encyclopédie* et son rayonnement en Italie », *Cahiers de l'Association internationale des Études françaises*, nos. 3-4-5, 1953, p.11-17. Mario Rosa, « Encyclopédie, < Lumières > et tradition au 18e siècle en Italie », *Dix-huitième siècle*, no. 4, 1972, p.109-168. Madeleine F. Morris, « The Tuscan editions of the Encyclopédie » dans *Notables encyclopedias of the late eighteenth century : eleven successors of the Encyclopédie*, Oxford, Voltaire Foundaition, 1994, p. 51-84.

13 Voir M. Rosa, *article déjà cité*, p.110.

14 Voir R. Darnton, *Op. cit.*, p.61. 発行部数に関しては諸説あり定かではない。

15 Voir E. Levi-Marvano, *article déjà cité*, p. 228-248.

16 *Ibid.*, p.247.

17 Pierre Léopold からの援助については E. Levi-Marvano, 前掲論文, p.228-245 参照。

18 Voir R. Darnton, *Op. cit.*, p.61.

19 前者の見解は Levi-Marvano、後者は Venturi の見解である。Rosa の見解はリヴォルノ異本版における脚注の科学的中立性をその特徴として認めるが、論文自体はルッカ異本版、ならびにローマとルッカの工房について多くのページを割いていることからも分かるように、概ね後者の見解を踏襲している。なお、科学に対するイタリアの関心が非常に高かったという意見は 3 者に共通している。

20 本研究は慶應義塾大学に所蔵されている以下の版本を利用する：*Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* —Seconde édition, enrichie de notes, & donnée au public par M. Octavien Diodati. A Lucques : Vincent Giuntini, 1758-1771. *Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* —Troisième édition,

enrichie de plusieurs notes par une société de gens de lettres. A Livourne : Dans l'Imprimerie de la Société, 1770-1775.

21 Lucca 版、第 4 巻のリストからの推測。

22 ローマとルッカ異本版の攻防については M. Rosa の前掲論文 p.136-149 に詳しい。

23 ルッカ異本版からの脚注流用は、文章をそのまま掲載しているわけではない。多少の変更は施されているようである。Voir Madeleine F. Morris, *article déjà cité*, p. 79.

24 Cf. *Encyclopédie*. Edition de Livourne. T. III, p. 852.

25 全ての調査は済んでいないが、筆者が幾つか確認した限りでは、リヴォルノ異本版脚注末に Addition が付されていないものはルッカ異本版からの流用であった。

26 リヴォルノ異本版の＊を信用すれば、第 10 巻以降においてルッカ異本版の脚注を利用していないのは各巻 1 ～ 3 個という計算になる(例外は第 11 巻で、11 個の脚注が使用されていない)。